

49. 小腸壁のT細胞性リンパ腫

誌名	鶏病研究会報
ISSN	0285709X
著者	仁平, 真由美
巻/号	48巻1号
掲載ページ	p. 20
発行年月	2012年5月

鳥病カラーシリーズ

Color Illustration Series of Bird Diseases

49. 小腸壁の T 細胞性リンパ腫 (T-cell lymphoma in small intestine)

キーワード：成鶏、マレック病、T 細胞性リンパ腫



写真 1. 内臓の肉眼写真。空腸上部に 6×7 cm 大の腫瘍 (矢印) が認められた。

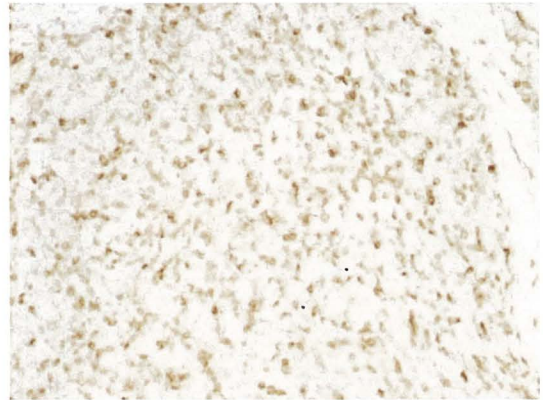


写真 2. 腫瘍のリンパ様細胞は免疫組織化学染色で CD3 陽性を示した。

動物：採卵鶏，ボリスブラウン，日齢不明（成鶏）
発生状況：2009 年 12 月 21 日に，500 羽のうちの 1 羽で発生した。生体では特に異常は認めなかった。
肉眼所見：空腸上部に 6×7 cm 大の表面が乳白色部と桃色部の混在する充実性の腫瘍を認めた。腫瘍は空腸の一部を残して取り囲むように発生し，腫瘍と空腸との境界は明瞭であった。表面には毛細血管の走行がみられた。肝臓は軽度に腫大し，実質は脆弱で全葉にわたり微小出血と黄白色針頭大の結節が多発していた。脾臓や他の臓器に病変は認めず，ファブリキウス嚢はすでに除去されており確認できなかった。（写真 1）
組織所見：腫瘍は，大小不同で類円形の核，粗顆粒状のクロマチンと明瞭な核小体，淡明な細胞質を持つリンパ様細胞がび漫性に増殖し，核分裂像も散見された。腫瘍の漿膜側は小血管の新生と結合織の増生を認め，その間に腫瘍細胞が浸潤していた。腫瘍の粘膜側は炎症細胞，赤血球，および細胞の壊死産物で置換され，粘膜固有層，粘膜下組織の構造は完全に消失していた。肝臓は炎症細

胞と結合織の増生を認めたが，リンパ様細胞の浸潤は認められなかった。免疫組織化学染色を行ったところ，腫瘍のリンパ様細胞は CD3（ニチレイバイオサイエンス，HISTOFINE CD3 ウサギモノクローナル抗体（SP7））陽性，鶏 Bu-1（Southern Biotech 社，Mouse Anti-Chicken Bu-1）は陰性を示した。（写真 2）
解説：腸管の腫瘍細胞は CD3 陽性を示し，T 細胞性リンパ球の腫瘍性増殖であった。人や動物のリンパ腫では空腸や回腸に限局性の T 細胞性のリンパ腫を形成するものがある。一方，鶏ではマレック病ウイルス（MDV）の感染に起因する全身性の T 細胞の腫瘍性増殖によるリンパ腫が知られている。本症例はマレック病で高率に見られるような肝臓，脾臓の病変を形成せず，腫瘍細胞の増殖の場は腸管の漿膜から筋層と孤在性であった。
成鶏で見られるマレック病は病変が穏やかで限局した病変を作ることもあり MDV の関与は否定できない。マレック病由来の腫瘍細胞は CD4 陽性のヘルパー T 細胞の確認が必要であるが，本症例では確認できなかった。

著者：仁平直由美（Mayumi Nidaira）¹⁾，沖縄県中央食肉衛生検査所，〒901-1202 沖縄県島尻郡南城市大里村大里 2015 ¹⁾現在：沖縄県北部食肉衛生検査所，〒905-0015 沖縄県名護市大南 1 丁目 13-11